

アトリエ
訪問

第7回

井上直久

画家

空中に浮かぶ島、海の上を走る列車……
不思議でありながら美しく調和がとれた世界を描く、井上直久。
大阪府茨木市にあるアトリエで、
今日も想像を膨らませ、筆を走らせている。

撮影 伊東俊介





「僕にとって、
絵を描くことは、
心の中に耳をすませること。」

「ジャングルみたいな外観だから、すぐわかりますよ」。電話でアトリエの場所を尋ねると、井上さんは笑いながらそう教えてくれた。確かに、ツタに覆われた一軒家は、車道からもひと目でわかるほど、不思議な存在感を放っていた。我々が車を止めると、ひょろりとした長身の井上さんが、アトリエから姿を現した。

—— 緑に覆われた、すてきな自宅ですね。

井上 ツタを適当に植えたらどんどん伸びてしまって（笑）。ほとんどが常緑ですが、アトリエの窓際は落葉性のツタにしました。そうすると、冬は葉がないから、日当たりがよくて暖かい。夏は葉が茂って日よけになるから涼しいんです。



ツタが美しい玄関。入って左側がアトリエで、右側が自宅。かわいらしい看板が客人を迎える。



白色は、アクリルやジェッソなど、濃度や粘度の違う数種類の絵の具を混ぜてつくる。



幻想的な「イバラード」の世界。アトリエには、これまでの作品が所狭しと並べられている。

アトリエをつくるときにこだわったのが、この東向きの窓。一枚の大きなガラスをはめてもらいました。東向きだと、午前中はたくさん光が差すけど、午後は光の差し方がほぼ一定になる。僕が絵を描くときのリズムと合っていて、いいんです。——ご自宅を改築して、アトリエをつくられたそうですね。

井上 僕は、ずっと高校教師をしていたんですが、画家になりたいという思いが募り、43歳のときに教師を辞めてアトリエをつくりました。家内には心配をかけましたが……。

その後、友人が出版社を紹介してくれたことがきっかけとなり、東京で個展を開けるにまでなりました。そしてあるとき、^{みやざきはやお}宮崎駿監督が個展に来てくださったんです。ちょうど、映画「耳をすませば」の制作中だったらしく、後日、スタジオジブリから「主人公の少女が空想するシーンを描いてもらえないか」と依頼されました。うれしかったですね。映画では、僕が長年描いている「イバラード」の世界を表現しました。——「イバラード」とは、どのような世界なのでしょう。

井上 僕の心の中にある空想の世界です。宮沢賢治が岩手県を「イーハトーブ」と呼んだように、あるとき、自分の住んでいる大阪府茨木市を「イバラード」と呼んでみたんです。そうしたら不思議と、自分の周りの世界が今までとまったく違って見えて、想像がどんどん膨らんでいきました。以来、自分が空想する世界を「イバラード」と名付け、作品を描き続けています。

——新版教科書『美術2・3』の「空想の世界を旅する」では、井上さんの制作過程をご紹介します。作品を制作するとき、まずキャンヴァ



いのうえ・なおひさ

1948年大阪府生まれ。
金沢市立美術工芸大学卒業後、
広告代理店のデザイナーを経て、高校教師に。
83年『イバラードの旅』で講談社絵本新人賞を受賞。
92年から作家活動に専念。
95年に映画「耳をすませば」の制作に参加する。
「イバラード」という空想世界を30年以上にわたり
描き続け、全国各地で個展を行っている。

スに、いろいろな色の絵の具をまき散らすそうですね。

井上 僕の場合、真っ白なキャンヴァスに描きかけを見つけるのは難しいんですが、さまざまな色が混ざったキャンヴァスを眺めていると、建物や人の像が見えてきて、イメージやストーリーが次々と浮かんでくるんです。その見えたままに筆を進めていくと、作品ができあがる。だから、どんな絵になるか自分でも最後までわからないんです。自分の心の奥にある世界が引き出されるようで、描くのがすごく楽しいですよ。

映画「耳をすませば」の英語のタイトルは「Whisper of the Heart(心の声)」というらしいのですが、最初にそれを知ったとき、あっ!と思いましたね。だって、僕にとって絵を描く行為は、まさに「心の声に耳をすませる」ことなので。

だから、あの映画との出会いは偶然じゃないな……なんて、今になって思うんです。